

筋肉ラグビー選手は合同身体検査で全
裸測定・羞恥採尿され快楽堕ちを記録
される

2026

•

9

•

28

目次

第
01
話

第
02
話

第01話

「篠原、ラスト一本！」

主将の声に、篠原蓮はタックルバッグへ肩から突っ込んだ。
バッグを抱えていた二年が、芝の上に尻もちをついた。

笛が鳴る。

「今日のスプリント、蓮さんがぶっちぎりでしたよ」

一年の声に、蓮は歯を見せて笑った。

「次の試合、ベンチに座る気はねえからな」

「飯は試合のあとだぞ、エース」

先輩が背中を平手で叩いていった。

蓮は汗を拭い、給水のジャグへ向かった。

その手前に、マネージャーが立っていた。

「篠原さん、着替えないで監督室に来てくれって」

「俺だけ？」

「……ほかの人は、普通にクールダウンです」

マネージャーの目は、蓮の顔ではなく膝のあたりを見ていた。

監督室の空気は、湿布と古い紙の匂いがした。

犬飼剛は四十五歳、この部を十年見てきた監督だ。

机の上に、一枚の通知が置いてあった。

『合同身体検査 本日十八時 スポーツ医科学センター』

「今期の合同名簿に、お前の名前が入った」

「身体検査なら、春にやりましたけど」

「あれとは別物だ。推薦候補だけが受ける」

「推薦……」

「プロから声がかかっている選手は、健康管理の記録を先方に出す。そういう決まりになっている」

犬飼は通知の端を、指の腹で叩いた。

「昨日のラインアウトのあと、左の膝裏をかばってたな」

「あんなの、毎試合です」

「俺は報告を受けていない」

蓮は口を開きかけて、奥歯を噛んだ。

「……俺が行かなかったら、どうなるんですか」

「推薦は降りる。先発からも外す」

「は？」

「任意の検査だ。書類の上ではな」

犬飼は顔を上げなかった。

「五時半に部室の裏へ車が来る。私服は持っていくな」

「着替えは向こうっすか」

「向こうで服を渡される。帰りに返してもらえ」

「……変な検査じゃないでしょうね」

「恥ずかしい仕事じゃない。選手の仕事だ」

蓮は通知を掴んで部屋を出た。

扉が閉まる直前、犬飼が受話器を取る声が背中に届いた。

『ええ、今日行かせます。……ええ、映像の件も、先方には伝えてあります』

蓮は振り返らなかった。

送迎のバンに乗っていたのは、蓮ひとりだった。

運転手は一度も振り返らない。

座席の背に、番号のシールが貼ってある。

『17』

蓮は左の膝裏を親指で押した。

痛くない。

痛くないのに、腹の底が冷えていた。

スポーツ医学センターの受付は、病院よりも白かった。

「篠原蓮さんですね。こちらにお着替えください」

受付の女が紙袋を差し出した。

中身は、薄い水色の前開きの上衣と、紐で締めるズボンだけだった。

「パンツは」

「検査服の下には、何も着けません」

「冗談だろ」

「私服と靴はロッカーでお預かりします。鍵はこちらで保管します」

女は笑いもせず、紙コップを一つ置いた。

「それと、検査前にこちらをすべて飲んでください。一リットルです」

「全部かよ」

「採尿の項目があります。飲み終わるまで、ここでお待ちします」

蓮は紙コップを三回注ぎ足され、腹が張るまで水を流し込んだ。

更衣室のブースの鏡に、日に焼けた肩と太い首が映った。

練習着を脱ぎ、ボクサーパンツに指をかける。

一拍。

パンツを下ろした。

ちんぽが冷えた空気に縮こまり、蓮は舌打ちした。

検査服を羽織ると、布が薄すぎて、胸の筋も腹の段も透けていた。

ズボンを穿くと、股間の膨らみが布越しに形まで出る。

「……ふざけやがって」

カーテンが、外から勝手に開いた。

白衣の男が立っていた。

眼鏡、無精ひげ、首から下げたタブレット。

胸の名札に『記録 東雲』とある。

「着けてないか確認する」

「は？」

東雲はズボンのウエストに指をかけ、前だけを引き下ろした。
冷えた空気が、縮んだちんぽと玉に当たった。

「おい！」

「皮は剥けてる。陰毛は整えてない。記録」

東雲はタブレットに二行打ち込み、ウエストを戻した。

「てめえ、今のも撮ってんのか」

「更衣室は撮らない。俺の目で見ただけ」

カーテンが閉まった。

ロッカーの鍵が回る音が、ブースの外で鳴った。

待合室には、同じ水色の検査服の男が四人いた。

全員、体がでかい。

誰も目を合わせない。

蓮は空いた椅子に座り、太腿を閉じた。

隣の男が、前を向いたまま小声で言った。

「お前も推薦組か」

「ラグビー。そっちは」

「柔道。……先月ここに來たうちの先輩、あれから毎月呼ばれてる」

「何の検査で」

「知らねえ。聞いても、言わねえんだよ」

柔道の男は、膝の上で拳を握った。

受付がクリップボードを持ってきて、蓮の前に屈んだ。

『身長 体重 体脂肪 周径 心肺 柔軟

』

■
■
■
■
■

下の三行は、黒いペンで塗りつぶされていた。

「黒いとは何だ」

「検査官から説明があります」

「今ここで言えよ」

「担当は主任の神代先生と、記録の東雲先生です。ご質問は先生へどうぞ」

神代の名前に、蓮の喉が詰まった。

去年の合同説明会で、壇上から選手を一人ずつ指差し、筋肉の付き方を笑いながら批評していた白衣の男だ。

壁の掲示に目が行く。

『検査中の映像は、治療管理のため記録します』

「映像……」

蓮の口から、声が漏れた。

膀胱が、水でずしりと重かった。

ブザーが鳴った。

「十七番、篠原蓮さん。検査室へどうぞ」

蓮は立ち上がった。

廊下の床は冷たく、サンダルが底が、ぺた、ぺた、と鳴った。

突き当たりの扉が、細く開いている。

振り返ると、待合室の扉はもう閉まっていた。

「どうぞ、篠原さん。お待ちしていましたよ、エース」

第02話

「全部、脱いでください」

神代修の声は、よく通るのに少しも大きくなかった。

検査室は、体育館の半分ほどの広さだった。

中央に金属の測定台がある。

正面に高い椅子が二脚あり、左に神代、右に東雲が座っていた。

東雲の横には三脚が立ち、レンズが蓮の足元を向いている。

「……ここですかよ」

「ここで、です。検査服はその四角の中に置いてください」
神代が床のテープを指した。

蓮は扉を見た。

閉まっていた。

「脱衣も記録に入ります。態度も、です」

東雲がタブレットを叩き、三脚の赤いランプが点いた。

蓮は上衣の紐を解き、肩から落とした。

薄い布が床で、ぱさ、と鳴る。

胸と腹が、冷えた空気と二人の目に晒された。

ズボンの紐に指をかける。

「そこで手が止まる選手は多いんですよ。篠原さんですか」

「うるせえ」

紐を引いた。

ズボンが足首まで落ち、縮こまったちんぽが垂れた。

蓮は両手を体の横に下ろし、顎を上げた。

「いい姿勢です。台の真ん中へどうぞ」

蓮は裸足で測定台に乗った。

金属の冷たさが、踵から這い上がった。

東雲が身長計のバーを下ろし、蓮の頭に当てた。

「身長、百八十二」

体重計の数字が跳ねる。

「九十四キロ。体脂肪、十一パーセント」

神代は数字を聞いたびに、目を細めた。

「立派なプロップの体ですね。首が太い。肩が厚い。いい肉です」

「肉って言うな」

「では、いい体です。腕を上げて」

東雲がメジャーを持って台に上がり、蓮の胸に巻いた。

乳首の上を、メジャーの縁がこすった。

「胸囲、百八」

メジャーが太腿に移る。

付け根ぎりぎりまで上がってきて、指の背が玉に触れた。

蓮の腰が引けた。

「動くな。測り直しになる」

「わざと当ててんだろ」

「右大腿、六十二」

東雲は答えず、左に移った。

また指の背が、玉の裏をかすめた。

「……っ」

「左、六十一。左右差、許容範囲」

「前を向いて。足は肩幅、腕は体の横に」

シャッターが鳴った。

「後ろを向いて」

背中と尻に、レンズの気配が刺さる。

シャッターがまた鳴った。

「横」

三方向から、全裸の体が画面に貼りついた。

東雲がタブレットを蓮に向けた。

正面の写真で、ちんぽが小さく縮こまっている。

「消せ」

「治療管理の記録です。消去の権限は、ここにはありません」

「じゃあ誰にあんだよ」

「監督室と、先方との契約の中に」

神代は膝の上で指を組んだ。

「さて、周径の最後です。篠原さん、ちんぽの長さを測ります」

蓮の顔から血の気が引いた。

「……は？」

「陰莖長。泌尿器の基礎データです。長さど、伸ばしたときの長さ。東雲くん、定規を」

東雲が金属の定規を持ってきて、蓮の前に膝をついた。

定規の端が、恥骨に押し当てられる。

冷たい金属が、ちんぽの付け根の毛を押し潰した。

「平常時、九センチ」

「読むなって言ってるんだろ」

「読まないと記録にならない」

東雲が淡々と打ち込んだ。

神代が椅子から立った。

白衣の裾が、蓮の膝に触れる距離まで来る。

神代の頭は、蓮の目の高さより少し低い。

それでも、見上げられている気がしなかった。

「次は伸長時です。失礼しますね」

神代の指が、ちんぽの先をつまんだ。

皮ごと、前へ引っ張られる。

「いっ——」

「痛いのは最初だけです。力を抜いて」

「抜けるか、こんなもん！」

神代はつまんだまま、指の腹で亀頭をゆっくり撫でた。

一度。

二度。

蓮の下腹が、ひくりと跳ねた。

「伸長時、十二。……おや」

指の中で、ちんぽが重くなっていく。

血が集まる。

皮が引き、亀頭が半分顔を出した。

「やめろ、触んな、勝手に」

「勝手に大きくなっているのは、あなたのほうですよ」

神代は手を離れた。

支えを失ったちんぽが、下を向ききれずに、斜めに浮いた。

「ちようどいい。勃起時も測れますね」

「測らせるわけねえだろ！」

蓮は両手で股間を覆った。

「隠すと、項目が増えます」

「知るかよ、こんなの検査じゃねえ、健康診断で誰がちんこ握られて勃たされんだよ、そっちが触ったからだろ、俺が勝手にとかじやねえ、お前が擦ったからこうなってんだろぅが！」

声が裏返った。

神代は待った。

東雲も、定規を構えたまま待った。

三脚の赤いランプだけが点いていた。

「手を」

神代の声は、短かった。

蓮は奥歯を噛んで、手を下ろした。

ちんぽは、さっきより上を向いていた。

東雲の定規が、根元から裏筋に沿って当てられる。

金属の冷たさで、ちんぽがびくんと跳ねた。

「動かすな」

「動いてねえ！」

「勃起時、十七。硬さ、良好」

「番号と同じですね。覚えやすくて助かります」

神代が笑った。

鈴口に、透明な汁が一粒ふくらんだ。

東雲がそれを見て、打ち込んだ。

「尿道口に分泌。微量」

「汗だ」

「汗は、そこからは出ない」

神代が検査票を手に取り、空白の行にペンを走らせた。

「追加項目です。反応スクリーニング」

「勝手に足すな」

「追加は主任の権限です。署名を」

差し出された検査票の一番下に、署名欄があった。

その上の行が、さっきまで黒塗りだった場所だった。

『反応スクリーニング』

黒い帯の下から、ほかの文字も透けて見えた。

『採尿』『採取』

「署名しなければ、次の項目へは進めません。進めなければ、今日のあなたは『検査を拒否した選手』です」

蓮はペンを取った。

字が震えた。

篠原蓮。

インクが乾く前に、東雲が紙をめくった。

「検査服は乾燥室へ。次の部屋で返します」

「ここで返せよ」

「次の部屋で、です。心肺ブースへどうぞ。そのままです」
蓮は股間に手をやりかけた。

「検査中は、隠さないでください」

神代は、そう言ったただだった。

蓮は手を体の横に戻した。

勃ちかけのちんぽを揺らしたまま、裸足で廊下へ出た。
背後で、棚のロックがかかる音がした。

ほかの作品はサークルページから

https://www.dlsite.com/bl/circle/profile/=maker_id/RG01054794.html

奥付

作品名 筋肉ラグビー選手は合同身体検査で全裸測定・羞恥採尿さ
れ快樂堕ちを記録される

サークル タビユーへ

発行日 2026・9・28

レーティング R18